

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02760

研究課題名(和文)日本語会話における指差しの持つ態度表明機能の考察：マルチモーダル会話分析の視点

研究課題名(英文)An investigation into some expressive functions of pointing in everyday Japanese conversation: A multi-modal conversation-analytic perspective

研究代表者

杉浦 秀行(Sugiura, Hideyuki)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：70619626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル会話分析を採用し、日本語日常会話で観察される指さしの中で、特定の参加者の身体に向けられた指さし、特に、発話内容と指さしの対象(=特定の参加者)との間で指示関係が一致しない指さしのケースを取り上げ、指さしの持つ態度表明的機能を明らかにすることである。本研究では、とりわけ、会話参加者たちが一時的に忘れてしまった物を想起する際に、想起した語とともに相手に向けて産出される指さしに着目した。分析の結果、この種の指さしは問題となっている一時的に忘れた対象を想起したことを公然化するための資源として利用されていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、次の2点に集約できる。第一に、指さしについての先行研究において、特定の相手に向けられた指さしの中でも、これまであまり研究されていない発話内容と指示対象との間に指示関係が一致しない指さしのケースを取り上げ、指さしの持つ態度表明的機能(非指示的特性)の一端を明らかにすることができた。

第二に、先行研究と異なり、日常の自然会話の参加者たちが複数の言語的・非言語的資源(発話、視線、身体動作、物理的環境など)を同時に利用しているという点に着目し、自然会話の参加者たちが展開していく相互行為のプロセスの総体の中で指さしの持つ態度表明的機能(非指示的特性)を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study employs multimodal conversation analysis (which integrates the analysis of both verbal and nonverbal resources mobilized by participants in interaction) to investigate a type of pointing gesture apparently utilized not for referential purposes. The study particularly focuses on cases where a current speaker points towards his or her recipient while producing a word that the speaker temporally forgets but suddenly remembers after some search. It demonstrates that this type of pointing is utilized as a resource to publicly and visibly claim that the speaker is now remembering the word for the search.

研究分野：会話分析

キーワード：指さし 会話分析 マルチモーダル分析 日常会話

## 1. 研究開始当初の背景

ジェスチャー研究では、通常、(しばしば発話と共起する)指さしは、方角や位置や事物を指し示すものとして考えられている(Kita, 2003)。しかしながら、近年の会話分析の研究によれば、会話中の参加者が産出する指さしは、単に対象を指し示すことで実現しているのではなく、指さしとともに産出される発話、進行中の発話連鎖(先行発話と現発話の流れ)の特性、会話が行われている空間、その空間における参加者たち(の身体)や事物の配置、どのように会話に参加しているか(「参加の枠組」と呼ばれるもの)などとの相関関係の中で、適切なタイミングで対象を指し示すことで実現していると報告されている(例えば、Goodwin, 2003, Mondada, 2007など)。さらにMondada(2007)は、指さし(厳密には、ペン先を使って指し示すこと)が会話における「今ここ」に存在する事物を指し示すための資源として利用されるだけでなく、参加者による次のターン(発話順番)の自己選択を主張するための資源(つまり、自分が次の話者であることを示すための資源)としてシステムティックに利用されていることを報告している。さらに、自己選択を主張するために産出された指さしは、その参加者の発話の終結前に撤退するものもあれば、発話の終結部を超えて継続されるものもあるとしている。前者の場合は、指さしの撤退によって、自分の発話順番が終結することを投射することを示し、後者の場合は、その発話だけでなく、それより以前に自分が開始した発話の連鎖についての発話の権利と義務を公然化していると論じている。このようにMondadaの研究は、**会話の特定の局面における指さしには指示的特性だけでなく態度表明的機能(非指示的特性)があることを示唆している**と言える。

上記のMondadaをはじめとする先行研究では、発話に伴う指さしと指示対象との指示関係が一致するものを研究対象としているが、親しい二者間の日本語会話における指さし行動を分析した荒川(2011)は、**発話に伴う指さしと指示対象との指示関係が一致しないケース**が多数あることを報告している。荒川の研究では、この種の指さしは発話の受け手に向けられたものが多く、「親密さを表すポジティブポライトネスへの配慮として相手と話題を共有していることを明示する機能」と「思考を促進するという認知的な機能」という2種類の機能があると報告しており、指さしの指示以外の特性について重要な指摘を行っている。

上記のMondadaや荒川の研究を足掛かりに、本研究者は指さしの持つ非指示的性質(態度表明的機能)について予備的考察を行った。この予備的考察では、3者間の会話で「語り(story-telling)」が展開されている中で、「語り手(teller)」が特定の参加者の身体に向けて指さしをする際に、**発話内容と指さしの指示対象(参加者の身体)との指示関係が一致しないケース**に焦点を当て、以下の可能性があることを明らかにした。

- (1) Mondada(2007)と同様に、語りの開始部で産出される指さしは、「発話順番の自己選択(発話権の確保)」の資源として利用されている
- (2) 展開中の語りの中で、産出した指さしを保持し続けることによって、「ターンの維持(発話権の維持)」の資源として利用されている
- (3) 展開中の語りの終結部で特定の参加者に向けた指さしは、次話者選択の資源として利用されている
- (4) 展開中の語りの中で産出される指差しは上記の「発話順番取り組織(turn-taking organization)」における機能の他に、聞き手に「特定の情報に注目させる」という語り手のスタンスとも係わりがありうる
- (5) 1~4より、指差しの持つ非指示的特性にはいくつかのバリエーションがある

以上の予備的考察を行ったものの、次に挙げるような点について課題が多く残っていることを突き止めた。

- (1) データが限られたものであること：上記の考察は「語り(story-telling)」という発話行為タイプに限定したものであること(他の行為タイプで同様の指さしのケースはあるのか?)
- (2) この種の指さしの態度表明的機能(非指示的特性)について、同じ「語り」でも二者間の会話と三者以上の多人数会話の比較検討の必要性
- (3) 指差しをする参加者が話者(語り手)の時と聞き手(語りの受け手)の時の違いの分析・考察の必要性
- (4) 発話、視線、指差し以外の身体動作を含めた包括的分析による指さしの位置づけに関する分析・考察の必要性

上述した研究の学術的背景と本研究者の予備的考察を踏まえ、本研究では言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル会話分析を採用し、日本語の日常会話で観察される指さしの中でも、特定の参加者の身体に向けられた指さし、特に、先行研究ではあまり考察されていない発話内容と指差しの対象との間で指示関係が一致しない指さしのケースを取り上げ、指さしの

持つ態度表明的機能（非指示的特性）の種類・バリエーションを明らかにすることを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、言語的・非言語的要素を射程に入れたマルチモーダル会話分析を採用し、日本語日常会話で観察される指さしの中で、特定の参加者の身体に向けられた指さし、特に、発話内容と指さしの対象（＝特定の参加者）との間で指示関係が一致しない指さしのケースを取り上げ、指さしの持つ態度表明的機能（非指示的特性）の種類・バリエーションを明らかにすることである。本研究の特色は、この種の指さしのケースについて、自然会話データを収集し、収集したデータからこの種の指さしが生起している行為タイプを特定し、行為タイプごとに(1)発話産出プロセスにおける指さしの開始・撤退のタイミング、(2)指さしの対象、(3)指さしをする際の腕の軌道、(4)指さしと同時に展開される視線行動・身体動作を総合的に分析・考察することによって指さしの持つ態度表明的機能（非指示的特性）を明らかにすることにある。

## 3. 研究の方法

本研究の基盤となっているのは、社会学者の Harvey Sacks たちが確立させた会話分析（Conversation Analysis）の分析手法を採用した質的研究である。会話分析は、分析対象となる現象（発話によって達成される行為）を含んだ会話の断片のコレクションを作成し、詳細に分析することを通じて、会話の中に秩序立って現れる社会的行為のパターンや手続きを抽出し、記述していく研究手法である。本研究では、とりわけ、近年 C. Goodwin や M. Goodwin らが推し進めている言語的資源と非言語的資源の両方を射程に入れたマルチモーダル会話分析を採用した。マルチモーダル会話分析では、発話や視線、表情、身体動作だけでなく会話が行われている物理的環境に存在するあらゆる要素・対象をも相互行為の資源であると捉え、ビデオ録画によってアクセス可能な音声・映像データを詳細に観察することで、現実の会話の参加者たちがその時その瞬間に利用している複数の言語的・非言語的資源（発話形式、プロソディー、視線、表情、身体動作、物理的環境等）を総合的に分析することで、参加者たちがどのように相互行為上の目的を達成しているかについて、相互行為の現実に沿って適切かつ正確に記述することが可能になるとしている（C. Goodwin, 2000, 2003, 2007）。本研究においても、マルチモーダル会話分析の分析手法を用いて、実際の会話の参加者たちが利用する言語的・非言語的資源との関係性を総合的に分析することによって、指さしの持つ機能の特性（の種類・バリエーション）を相互行為の現実に沿って適切かつ正確に記述することが期待できる。

本研究は、上述したマルチモーダル会話分析の手法に則り、以下の手順で進めていった。まず、日常の自然会話をビデオ録画し、音声部分について会話分析の転写システムに従って文字データに書き起こす。その後、その書き起こしデータとビデオ映像を参照しながら指さしの中で特定の参加者の身体に向けられた指さし、特に、発話内容と指さしの対象（＝特定の参加者）の間で指示関係が一致しない指さしのケースを含んだ会話の断片を抽出する。次に、抽出した会話の断片の中の指さし部分について、Lorenza Mondada によって考案された「マルチモーダル転写法（Multimodal Transcription）」を採用し、指さしの開始・撤退のタイミング、視線や他の身体動作などが発話のどの位置と対応しているのかについて、詳細に書き起こす。そして、それぞれの指さしがどのような発話行為タイプで生起しているかを特定し、発話行為タイプごとに分類する。その後、発話行為タイプごとに、ビデオ映像と書き起こされたデータの双方を詳細に分析し、発話産出プロセスにおける指さしの開始・撤退のタイミング、発話形式やその他の身体動作などとの関係を詳細に分析する。この一連の作業を通じて、この種の指さしの持つ態度表明的機能（非指示的特性）について明らかにすることを試みた。

## 4. 研究成果

本研究の主要な発見として、発話の受け手に向けて産出される（発話内容と指さしの対象の支持関係が一致していない）指さしは、会話の参加者たちが「今ここで」取り上げるべき対象を一時的に思い出せない対象を想起した際に産出されることである（杉浦, 2019）。以下の会話の断片で具体的事例を示す。

この会話の断片では、タカ（仮名）が昔エジプトに家族旅行した際に見たイスラム教の建築物であるモスクについて語っている時に、「モスク」という言葉を一時的に思い出せず、語りの受け手であるカズ（仮名）とともに協働で記憶探索し、02 行目にあるように語りの受け手であるカズの方が先に「モスク」という言葉を思い出し、提示している。ここでは、タカが 01 行目から 02 行目にかけて、「上に全部(0.5)スタンドガラスがあって、=上の(.)模様(.)全部バガ::って-」と、モスクの内部構造を説明している。この説明中の 02 行目の「全部バガ::って-」の「ガ」に重なる時点で、3 行目でカズは「あ」で切り出すことで、自分の認識に変化があったことを公然化し、その直後、断片中の図 1 にあるように 1 度手を叩き、その後、図 2 にあるようにタカの身体に向けて指さしをして、想起した「モスク」という語を 2 度立て続けに産出している。注目されたいのは、ここでの指さしの対象はタカ（の身体）で、発話されている「モスク」という語との間には、指示関係に齟齬があるという点である。ここでの指さしは、例えば「この本」といって眼前の本を指し示すための指さしとは本質的に異なっていることがわかる。本研究では、この断片の事例のように、会話の参加者が一時的に思い出せない言葉が生じた際に、その後、会話が進行的中でその言葉を想起した際に、その言葉とともに発話の受け手に向けて指さしが産

出されることが明らかとなった。

本研究で重要な点は、この種の指さしが産出される場合、思い出した言葉とともに産出されるだけでなく、多くの事例で、指さしの直前で、認識の変化を示す「あ」、手を叩く動作が生起しているという点である。言わば、**思い出した言葉を公然化するパッケージとして「あ」手を叩く 指さし&思い出した言葉**というフォーマットが特定の会話参与者だけに限らず、**繰り返し利用されている**という点である。また、指さしとともに産出される「思い出した言葉」の形式についても本研究で観察できたものは、いわゆる言い切り型で、思い出した言葉の後に終助詞等が付かない形式である。また、音声的には、この断片の事例にみられるように「思い出した言葉」は強く発語されている傾向にある。

本研究の目的は、ある種の指さしの持つ態度表明機能(非指示的性質)を明らかにすることであったが、この事例に見られる指さしは、その直前に産出される認識変化を示す「あ」、手を叩く動作、さらには思い出した言葉の発話形式・音声的特徴からも示唆されるように、**問題となっている言葉を思い出したことを公然化する・強く表明するための資源**として利用されていると言える。

本研究で採用した会話分析の近年の研究では、認知(cognition)(あるいは認識)の問題を、個人の頭の中だけの問題ではなく、**会話という相互行為の場の中で表出される、いわば社会的な現象**として捉え、様々な研究プロジェクトが展開されている。本研究が相互行為の中の認識変化・知識に関わる主張の公然化に関わる一連の研究に対して示唆できることは、相互行為の中では、「あ」のように特定の言語形式だけで認識変化・知識に関わる公然化がなされるだけでなく、ここで取り上げた事例のように、**発話の開始部から終結部にかけて、言語的要素と非言語的要素を組み込みながら、漸進的に認識変化・知識に関わる主張を公然化している**ということである。相互行為における認知の問題を追及していく上で、マルチモーダルなレベルで発話(あるいは発話を超えた)プロセスに着目することで、さらなる研究が進展していくことが期待される。

(1) モスク  
01 タカ: 上に全部(0.5) ステンドガラスがあって、=上の(.)+ 模 様 (.) +  
タカ<sup>o</sup> +両手を下ろす--- +  
02 タカ: +全部バ[ガ : # \* : つ \* [て#-  
03 カズ: [あ # \* [モスクモスク.+  
タカ<sup>o</sup>: +両手を挙げて動かす----- +  
カズ<sup>o</sup> \*手を叩く-\*指さし ---->>  
Fig #図1 #図2



04 タカ: モスクモスク[モスク.>そうそうそうそうそうそう<=  
05 カズ: [モスクだね?

会話の断片 (杉浦, 2019: 89-90)

【図中の書き起こし記号の見方】

- 「タカ:」の行はタカの発話を示す。
- 「タカ<sup>o</sup>」の行はタカの身体動作の書き起こしを示す。
- 「+」はタカの身体動作の区切り(開始点と終結点)を示す。
- 「カズ:」の行はカズの発話を示す。
- 「カズ<sup>o</sup>」の行はカズの身体動作を示す。
- 「\*」はカズの身体動作の区切り(開始点と終結点)を示す。
- 「(0.5)」は発話中の間隙の長さが0.5秒であることを示す。
- 「(.)」は発話中のごく短い間隙を示す。
- 「-」は発話が途切れていることを示す。

- 「=」は直前の部分に間髪入れずに発話を続けていることを示す。  
「#」は図が挿入されている時点を示す「[」は発話の重なり開始点を示す。  
「]」は発話の重なり終結点を示す。  
「ガ::」は「ガ」が引き延ばされて発音されていることを示す。  
「モスク」のように下線部分のある語は強く発音されていることを示す。  
「>そう<」は「>」「<」で囲まれた部分が周りよりも速く発音されていることを示す。

#### 参考文献

- 荒川歩 (2011) 「指さし行動と発話による談話の達成」『社会言語科学』14(1):pp.169-176.
- Goodwin, Charles. (2000) Action and embodiment within situated human interaction. *Journal of Pragmatics*, 32(10), 1489-1522.
- Goodwin, Charles. (2003) Pointing as Situated Practice. In Kita Sotaro (ed.), *Pointing: Where Language, Culture and Cognition Meet*, pp. 217-241. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Goodwin, Charles. (2007) Environmentally Coupled Gestures. In Susan D. Duncan, Justine Cassell, and Elena T. Levy (eds.), *Gesture and the dynamic dimension of language*, pp.195-212. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kita, Sotaro. (2003) *Pointing: Where Language, Culture and Cognition Meet*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Mondada, Lorenza. (2007) Multimodal Resources for Turn-Taking: Pointing and the Emergence of Possible Next Speakers. *Discourse Studies*, 9(2): 194-225.
- 杉浦秀行 (2019) 「記憶探索活動中に参与者に向けられた指さしの非指示的性質」安井永子・杉浦秀行・高梨克也編『指さしと相互行為』pp.89-121.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Hideyuki Sugiura
2. 発表標題 Setting the teller aside: Story-recipients' interactional coordination of gaze and body
3. 学会等名 International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉浦秀行
2. 発表標題 語り手を一時的に「脇に置くこと」：物語の受け手間の視線と身体の調整
3. 学会等名 会話分析研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideyuki Sugiura
2. 発表標題 Non-deictic pointing: Multimodal realization of remembering a word and providing ratification
3. 学会等名 The 5th International Conference on Conversation Analysis (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉浦 秀行
2. 発表標題 協働的記憶探索活動における指さし 一指さしの非指示的特性一
3. 学会等名 第42回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉浦 秀行
2. 発表標題 物語りの受け手間の視線と身体の調シンポジウム「日常会話コーパス」IV整 - 語り手への相互行為的配慮 -
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」IV
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉浦秀行
2. 発表標題 Non-deictic pointing: Multimodal realization of remembering a word and providing ratification
3. 学会等名 国際会話分析学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 安井 永子、杉浦 秀行、高梨 克也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 指さしと相互行為	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hideyuki Sugiura's Homepage <a href="https://sites.google.com/site/hidesugiuraca/">https://sites.google.com/site/hidesugiuraca/</a>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------